滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2018夏 vol.128

座談会

近代滋賀の教育人物史

新撰 淡海木間攫 72
ヤンソン「日本・蝦夷図」

INFORMATION STATION
催し案内 2018夏

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS
サンライズ出版の新刊案内

座談会

近代滋賀の教育人物史

明治期の県の教育行政や地域の学校運営、大正期の女子教育や障害児教育、昭和戦前期の郷土教育などで活躍した29名の業績と人物を紹介した『近代滋賀の教育人物史』が刊行されました。
同書を執筆・編集した滋賀県教育史研究会の12名のうち8名にお集まりいただき、同書について語り合っていただきました。

滋賀県教育史研究会の設立・活動休止・再興

――今回刊行された『近代滋賀の教育人物史』の内容に入る前に、滋賀県教育史研究会の成り立ちをご説明いただけますか。

滋賀大学名誉教授・名古屋芸術大学人間発達学部教授
木全清博（きまたきよひろ）さん
1948年愛知県生まれ

木全　平成9年（1997）に研究会を設立して『滋賀県教育史研究』という紀要を1号だけ出しました。フィールドワークで近江八幡の学校巡りをしたり、3年ぐらいはいろいろやったんですが、大学院生などの学生主体だったので、卒業して人が入れ替わったりすると、なかなか継続的な活動は難しく、休眠状態になってしまった。

大阪商業大学
総合経営学部准教授
宮坂朋幸（みやさかともゆき）さん
1973年長野県生まれ

宮坂　8年くらい活動休止期間があったようで、滋賀県の大学に着任した僕が久保田さんと相談して、会を再興させようじゃないかという話になり、木全先生をご紹介いただきました。
そして、平成21年（2009）3月に活動を再開させ、定期的な研究会を催すようになりました。

愛荘町立愛知中学校教頭
久保田重幸（くぼたしげゆき）さん
1966年滋賀県生まれ

久保田　宮坂先生もすでに教育史の専門研究者でしたが、滋賀県というフィールドでは、木全先生が第一人者でしたから。私は滋賀大学で木全先生に教わりましたし、教員の時代に滋賀大の大学院で学んだ時も助言をいただきました。

坂尾　僕も現職の教員でありつつ、滋賀大の大学院生として入会しました。だいたい2か月に1回、JR大津駅前にある滋賀大学のサテライトプラザで研究会を行い、フィールドワークもこれまでに2回ありました。甲賀市と東近江市に行きましたね。

湖南市立甲西中学校教諭
坂尾昭彦（さかおあきひこ）さん
1959年滋賀県生まれ

宮坂　滋賀県師範学校の講堂が甲賀市信楽町に移築されて、「谷寛窯（たにかんがま）」という信楽焼の工房になっているんです。そこを見学させてもらいました。

木全　例えば、今は近江八幡の観光案内所になっている白雲館も、滋賀大に来た昭和59年（1984）頃に初めて見て、これは学校に間違いないと思ったけれど、当時は屋根がつぶれ、壁も落ちそうなひどい状態でした。地元で保存運動が起こり、改装したのはいいけど、内部が観光案内所というのは私からするともったいない。学校資料館にしたらよかったのに。
近江八幡には、明治初期・中期、大正、昭和初期それぞれの学校建築が残され、近江兄弟社の幼稚園まである。八幡の学校建築巡りとかしたら、見るところがいっぱいある。

取材／編集部　写真／辻村耕司

書店にて
発売中

近代滋賀の教育人物史
滋賀県教育史研究会 編
発行：サンライズ出版
定価：2200円＋税

教育関係資料の豊富な滋賀県

――滋賀県は、教育・学校関係の資料が残っている方なのですか。

木全　滋賀は県の行政文書、とくに明治期のものが豊富に残っている県です。

宮坂　空襲で焼けなかったことが大きいですよね。

坂尾　ただ、『滋賀県教育会雑誌』（のちに『近江教育』と改題）という滋賀県教育会が発行していた戦前の機関誌は、発行元のあった県の教育会館が昭和28年（1953）に火事になった時に燃えてしまって。

宮坂　だから、各号を所蔵している筑波大学や早稲田大学などに行って見せてもらわなければいけない。

坂尾　彦根市立図書館にかなり所蔵されていますが、スキャンしてデジタル化されたものでもよいので、すべて県内で見られるとありがたいんですけどね。滋賀県の教育資料なんだから。

元滋賀県立図書館専門員
池田宏（いけだひろし）さん
1953年滋賀県生まれ

池田　人物によっては県庁文書がほとんどなくて、個人蔵の資料が見つかったり、木全先生が足で集めて作成した資料目録があったおかげで書けた人もいます。

宮坂　栗東歴史民俗博物館（栗東市）にある里内文庫は目録も整備されているし、非常に便利です。

木全　里内勝治郎は、処分される県の書類を買い込んだり、書き写したりして個人で持っていたんだよね。すごい資料です。

池田　公文書が失われるのは空襲で焼けるだけじゃないんです。戦後でも昭和の市町村合併の時に、どこも保存するところがないから帳簿などを焼いています。盛大に焼いたから、「新しい役場が火事かと思われた」という話を聞きました。

坂尾　学校でも、増改築や統廃合があると、明治からの書類はなくなったり、行方がわからなくなります。平成の大合併になると、学校資料は合併後の市町の図書館に寄贈する場合もありますが。

久保田　生徒数が減って廃校になる場合、文書類は統合される学校へ送られますが、結局、ほとんどは処分されます。受け取った方で、保存するために倉庫の建て増しするような予算はありませんとなった段階でほとんど捨てられる。

坂尾　青年学校[※1]なんて、受け皿の学校がなかったから、資料がなくて研究がほとんどありません。

木全　ない。僕はこの前、伊香（いか）郡の青年学校を調べたんだけど、なかなか大変だね。でもたまに学校の中で見つかることがある。

坂尾　20年ほど前に信楽中学校の会議室の棚の上にあった開かずの扉を開けてみたら、青年学校の資料だったことがあります。

宮坂　校長がちゃんと意識していれば、資料は残っていくものですよね。長野県はそうです。滋賀県で資料が残っている学校というと、どこがありますか。

久保田　彦根東高校は金亀（こんき）会という同窓会が資料館を建てて保存されています。明治初期の書簡資料まですべて残っていたので、『彦根東高百二十年史』をまとめられたんだそうです。県立盲学校も見事に残しておられた。今回の本の**山本清一郎**（せいいちろう）の部分は、ご遺族が残しておられた資料も使いましたが、その多くは盲学校の資料室にあったものです。木全先生に「行ってこい」と言われて、あまり期待しないまま行ってみて驚きました。こうした例は稀で、一般に歴史資料にとっては危機の時代でしょう。

宮坂　他府県では、学校の記念誌がつくられると、「もうつくったからいいよ」と、使った資料や、その他の資料までまとめて焼却処分されたという話も聞きます。

久保田　資料を燃やすのは校長ではなく教頭ですよ。今自分がその立場なので（苦笑）。年度末にした仕事の1つは、文書の廃棄です。みんなが、「これは捨てていいですか」と教頭に聞きにくるので、バッサリいってます。

木全　昔の教科書についてもそう。国定教科書が採用される明治36年（1903）より前の教科書はユニークなものが多いのですが、めったに残っていません。ところが、ある小学校へ行ったら、明治20年代のいろいろな教科の教科書が大量に残っていたんです。学校側は、「場所がないので、いらない」と言うから、「滋賀大にください」と言って、段ボール箱3箱くらいもらってきた（笑）。

宮坂　資料は本当に危機的な状況です。本書の関係で僕が3年くらい前に行って見せてもらった資料が、すでに所在不明になっていた学校もありますから。

木全　長浜の**中村林一**（りんいち）は、小学校の移転か何かの際に、学校資料を個人で保存しつづけたわけです。ご遺族が長浜城歴史博物館に寄託されて、中村林一コレクションとし

※1 **青年学校**　昭和10年（1935）、実業補習学校と青年訓練所を統合して、全国市町村に設置された学校。小学校卒業の勤労青年に職業教育・普通教育・軍事教育を行った。

て20年以上前に整理を依頼されました。明治10年代後半から20年代、とくに教育令までの間の文書がたくさん残っていて、僕にとっては「宝の山」でしたね。

池田　公文書を個人の家に持って帰るなんてことは、今だと問題になるかもしれませんが、昔の人はそこが曖昧だったから。旧町村の行政資料が、村長や重役だった人の家にあることは多い。遺族の方は、「こんなものが出てきました。いけないことですね」とおっしゃるんですけど、「残していただいてありがとうございました。これは町史にとって非常に重要な資料です」と言って、もらってきたことがあります。

明治期――教育に力を注いだ県令たち

――では、ご自身のご担当以外で第1章の明治期ではどの人物が印象に残りましたか。

神戸大学大学院 国際文化学研究員
浅井雅さん
1978年兵庫県生まれ

浅井　明治期の人物は、3人の県令から始まりますが、これは教育史としては珍しいのではないですか。

木全　あんまりないかもしれない。

浅井　ふつう明治初期の県令は、産業などに力を入れたはずで。教育に力を注ぐ県令は他の県にいるのかな。

宮坂　いますよ、長野県に。

一同　（笑）

馬場　初代県令の**松田道之**は内務行政の主流にいた人で、内務省では実力者でした。43歳で亡くなるのであまり知られてはいませんが。

元滋賀県立玉川高校教諭
八耳文之さん
1954年滋賀県生まれ

八耳　瀬田国民学校（大津市）の児童の絵日記の場合は、担任だった**西川綾子**自身が手元に置かれていて、亡くなった後に大津市歴史博物館に寄贈されて、平成28年（2016）に市の有形文化財になりました。

木全　結局残るものは、歴史に関心のある個人が残すんです。そのおかげで書ける。

滋賀大学教育学部准教授
馬場義弘さん
1960年大阪府生まれ

宮坂　2代の**籠手田安定**はどちらかというと全国の方で有名です。逆に「滋賀で活躍した人だったの？」と言われたことがあります。

木全　そのとおり。牧民官（地方長官）として非常に有名です。ちゃんと地に足の着いたことをやる人で、明治9年（1876）の5月から8月の半ばまで3か月半も県下12郡の学校を巡回しています。引き受ける地元の側にしてみれば、接待の仕方や期日を調整するのが大変だっただろうけど。

馬場　この時期の自署率調査も貴重ですよね。

木全　文部省が各府県に依頼した調査で、男女とも6歳以上を対象に自分の名前を書けるか書けないかを調べさせた簡単なものだけど、明治の初めから継続して残しているのは滋賀県だけです。

馬場　籠手田が県内を巡回した頃というのは地租改正事業が全国的に本格化する非常に忙しい時期で、教育方面に力を割いたのは珍しい。

池田　久保田さん担当の**外村省吾**もおもしろい。彼が彦根で教員を養成する仮教員伝習所を構想したのは、おそらく旧彦根藩士族の子弟に対して何ができるかという思いがあったのだろうと思います。士族は秩禄処分で没落したようにいわれるけれども、警察官や教員など、就職先を確保するために士族側でもいろいろ動いていました。

久保田　僕の見立ては、彦根学校の設立は、彦根という町の近代化に向けた取り組みの一つというものです。旧彦根藩士族が製糸場や鉄道をつくったりして彦根地域を近代化するなかで、外村はいわば「彦根の文部科学大臣」として教育による近代化をめざしたと考えます。また、彦根という町についてさらに言うと、彦根の学校を大事にし過ぎて、滋賀県の他地域と対立する傾向もみられました。明治時代の滋賀県会（現在の県議会）で彦根学校を県立化する際にも他地域の議員から反発を受けています。

池田　木全先生が担当なさった**正野玄三**は日野で「学区取締」を務めた人物ですが、以前は学区取締といったものは単なる名誉職だぐらいに思われていました。それが当時の資料をもとに、非常に多忙な職務だったことがわかったんですね。家業の薬屋のかたわら、小学校の卒業試験に立ち会ったり、蒲生郡内を飛び回っています。『近江日野の歴史』第4巻の木全先生のご担当部分とあわせ、ここまで学区取締の実態を紹介したのは初めてではないでしょうか。

『近代滋賀の教育人物史』で紹介している人物

第１章　明治期

1 松田道之	県下に学校を創設した初代滋賀県令
2 籠手田安定	「学事に尽力」する第２代滋賀県令
3 中井　弘	「奇人」県令と滋賀の商業教育史
4 外村省吾	滋賀の中等教育の先駆者
5 正野玄三	学区取締として地域の学校の振興を図る
6 柳田かめ	寺子屋から私塾・私立学校で教えた女性教師
7 大島一雄	滋賀の地における小学校教育の開拓者
8 辻勝太郎	高宮の小学校沿革誌をまとめる
9 浜野鉄蔵	県内外で活躍した「訓導兼校長」
コラム1 平山麟家	和算の私立学校創設と海津天満宮の「算額」
コラム2 松田勝子	滋賀県の女子教員養成の礎を築く

第２章　大正期・昭和初期の教師たち

1 塚本さと	五個荘で淡海女子実務学校を開校する
2 中野冨美	裁縫を通して人間をつくる
3 一柳満喜子	近江八幡でキリスト教精神に基づく幼児教育
4 河村豊吉	国語教育を究める
5 柚木勝久	地理教育の革新と提案
6 山本清一郎	滋賀盲教育の先達
7 西川吉之助	口話法聾教育の父
8 谷　騰	滋賀の子どもの個性を伸ばす教育を開拓する
コラム1 平木吉治郎	滋賀の手工教育と水口細工
コラム2 前川仲三郎	百瀬校の子どもの感性と表現力を耕す

第３章　昭和戦前期の教師たち

1 神田次郎	郷土教育による学校経営
2 矢嶋正信	農業教育を軸とした学校経営
3 栗下喜久治郎	郷土教育の研究と実践に取りくむ
4 田中秀雄	国語教育における「話方・朗読」指導
5 村瀬仁市	国史教育における「至難教材」の究明
6 中村林一	湖北の郷土史の研究や資料収集、郷土教材の授業を行う
7 西川綾子	国民学校で学級日誌（絵日記）を指導する
コラム1 池野　茂	近代滋賀の教育ジャーナリスト

注）複数の学校に勤務した人物もいますが、地図上では１校のみを示しました。創立後、移転した学校もありますが、創立時の位置を示しています。正野玄三は自宅の位置を示しました。

――1章で他にございますか。

宮坂　彦根の辻勝太郎が書いた『高宮小学校沿革誌』の自序に引かれた中国の歴史書『史記』にある言葉は、いいですよね。「前事を忘れざるは後事の師なり（以前のことを心に留めておくと、後にすることの役に立つ）」。学校の将来のために歴史を残すんだという自覚があったことがわかる。

大正期・昭和初期――女性の活躍と障害児教育

――つづいて、2章の大正期・昭和初期はいかがですか。

馬場　僕は自分の力で道を切り開いていった個性的人物、とくに中野冨美のような女性を何人か紹介したことが、この本の特長じゃないかなと思います。

八耳　中野冨美は、バックは誰もいない草津の商家の娘。東京で裁縫を本格的に習い、京都へ出て裁縫塾を立ち上げたんだけど、夫が亡くなって本人も病気になり、帰ってきて大津で新しい塾を開く。子育てをしながら、再婚はしますが、孤軍奮闘といってよい中で出資者を得る。出資者の家族の回想を読むと、しょっちゅう頼みに来るので、子どもだった自分にとっては嫌で仕方なかったと書かれている。結局、熱意に打たれてお金を出してもらえることになるんですね。

池田　同志社大学の先生に聞いたんやけど、創立者の新島襄は金を集めるのがとてもうまかったとか。

八耳　やっぱりそういう才能が必要なんでしょうね。戦争中に純美禮学園は財団法人化するんですが、その時に東洋レーヨンのトップが協力しています。

久保田　教育者であると同時に実業家でもなければならない。

木全　あんまり実業家然としていても嫌だけどね。

浅井　私は塚本さとや一柳満喜子など、女性の教育者を担当しましたが、やっぱり人脈がものをいうところがある。この2人の場合はもともと名家の生まれですけど、学校を建てるにあたって、中央の教育者とのコネクションづくりも熱心にやっているなと感じました。一柳満喜子でいうと、兄の恵三が広岡家に婿入りしたので、大同生命などからお金が出ていたり、広岡浅子の実家の三井財閥からお金が出ていたりします。

木全　私立は普通もっと早く潰れるからね。大正時代に新教育をやっていた学校は、設立者は一生懸命だし、協力者も現れるんだけど続かなかった。一番の問題は財力。近江兄弟社はとても珍しい例で、相当テコ入れがあったと思う。

浅井　一柳満喜子はアメリカに留学経験があったので、アメリカ人のハイド夫人から寄付金をもらい、新しい園舎を建てると同時に新教育を取り入れます。日本でも新教育の流れは全国的に起こりますが、多くは小学校の場で、幼児教育に取り入れているのは独特なところじゃないかと思います。

木全　この時代に、幼児教育で「自主」、「自立」とか言っているものね。

浅井　それは今もです。うちの子たちが近江兄弟社のこども園に通っているんですけど、自主性をすごく大事にしていて、2歳の娘も自分の用意は自分でするように言われる。自主・自立の精神が受け継がれているなと思いますね。

久保田　そう言われると、公立学校の方は伝統というか、過去の遺産を受け継ぐのが難しいように思います。私の勤務校（中学校）の校区内に愛知川小学校があるんですが、河村豊吉によって昭和初期には国語教育のメッカだったけれど、今の同校の先生方にお話ししても、「へえ、知らなかった」という反応が返ってくる。

木全　前川仲三郎が勤めていた高島郡の百瀬小、現在のマキノ南小学校に資料を探しにうかがった時も、こういう人物がいてこういう国語教育をしていたことを校長先生はご存じなかった。非常に興味をもたれて、逆にこちらが持っていた資料のコピーをすべてさしあげました。

坂尾　山本清一郎と西川吉之助は、「福祉の滋賀県」という面で、それぞれが作った学校には大きな意味があるのでは。

馬場　山本と西川に関する準備報告を聞いた時に、この本はおもしろくなると思いました。障害児教育の歴史は、一般的な通史では、初等・中等教育から区別された周縁の歴史として扱われる。しかし本書のような人物史の場合、それはむしろ教育の本質を鮮明に語るのだと思いました。さらにいえば、滋賀県の教育界が誇ってよい歴史を、本書は明らかにしたと思います。

池田　聾者（聴覚障害者）の教育に私財を投じた西川吉之助の場合は、資料的には具体的な金額などは全然出てこない。滋賀大学経済学部附属史料館にある西川家文書を見ても、聾話学校の記載はほとんどなく、今回の本で使った親族会議の資料が一点あったくらい。たまたま尾張徳川家の侯爵、徳川義親と知り合って、かなり大きな力にはなってくれるんだけど、結局最後は借家住まいになって自殺してしまう。

木全　時代の流れをいえば、明治33年（1900）の第三次小学校令で心身障害児に対する就学義務猶予・免除が書かれます。要するに、「学校へ来んでもいい」というわけ。義務教育から省かれた存在だっ

⬆昭和学園の生徒たちと谷騰
（『御大典記念　滋賀県小学校職員大写真帖』より）

た彼らに、大正時代から昭和初期にかけて目が向けられるようになる。それは「学問はいらない」と考えられていた女性に対しても同じで、大正半ばから高等女学校もふくめて女子教育が広がっていきます。

八耳　西川吉之助の娘で聴覚障害のある西川はま子は、谷騰や一柳満喜子など、いろんな人物と関わりますよね。谷がつくった私立昭和学園のことを私は知らなかったのですが、あの学校の精神は、その後継承されたんでしょうか。

木全　戦争中については、谷と西川の娘の昌子（はま子の姉）が近江兄弟社に入って、次男も職員になっていますね。

　公立学校へ行けない子を引き受けた昭和学園は、最近注目されている健常の子と障害のある子が一緒に学習するインテグレーション教育の走りともいえる。学習計画も生徒自身で立てるから、例えば、染織家の志村ふくみの兄で画家となった小野元衛は、ここに入学して絵ばかり描いていたわけ。近江八幡市立図書館に残っている画集を見たけど、これがまたすごい。

浅井　昭和学園が知られていないのは、これまで私立学校の教育を調べる研究者がいなかったせいでもありますよね。

木全　それは僕が反省すべき点でもあるんです。学校史は公立校が中心になって、私立の学校はほとんどふれない。例えば、京都の平安高校は、もとは彦根の藩校弘道館の跡地に、寺の子弟を教育するために創立された「金亀教校」という学校だから。それが京都に引っ越した。

――へぇ、そうなんですか。

木全　あまり知られてないよね。他に今回の本でも欠落しているのは、働きながら学ぶ子どもたちが通った実業補習学校やさっきも出た青年学校について。戦前、中学校や女学校へ行けたのは全人口の4分の1か5分の1ですよ。僕の両親もそうですが、ほとんどの子は小学校6年、ないしは高等科まで行っても8年で働きに出た。そういう人たちが夜間や季節限定で学んだ補習学校についてはほとんど資料が残っていない。

久保田　よく知られた近江絹糸（彦根市）の労働争議にしても、中心は自社経営の学校や市内の高校（ともに定時制）で学んでいた10代後半の若者たちですよね。

木全　もともとは、青年学校を義務化する時に、企業内の青年学校も義務化したんですよ。だから女子も工場内で学ぶ場ができた。それらが戦後、定時制の学校や企業の中の付属の高校になった歴史があります。

昭和戦前期――郷土教育の取り組みと国家主義への抵抗

――それでは、3章の昭和戦前期についてはいかがでしょう。

宮坂　昭和初期に郷土教育の先進的な実践校として全国的に知られた蒲生郡島村の島小学校の教員3人が重要ですが、担当している板橋孝幸さんが今日はおられませんね。

木全　1人目の神田次郎は、調べたことを地元の人たちに還元していくというか、全国一律の教育じゃなくて郷土に根差した教育をしようという立場。2人目の矢嶋正信は、そこから進んで書くだけでなく体験しようになる。座学から農業実習に重点が移って、米作に養豚やウサギの飼育を加えた多角的な農業経営を子どもに学ばせる。昭和初期の農村恐慌の後、地方の自力更生運動の中で全国各地でこうした「土の教育」が盛んになりました。

宮坂　今回の本にも載った、子どもたちが一生懸命学習園で働いている横で矢嶋校長が直立不動の姿勢で立っている写真が好きなんですよ。

木全　3人目の栗下喜久治郎は、滋賀師範を卒業してすぐに島小に着任した新人教員だったんだけど、神田・矢嶋校長のもとで郷土教育を実践し、20代前半の若さで全国的にも知られる教育者になっていく。東京の出版社からたくさんの著書を出し、生徒には「職員室でいつも原稿を書いている」姿が記憶されているというね。

――この時期の滋賀師範学校が優秀な教員を輩出していたともいえるのですか。

木全　神田と矢嶋は、明治の終わりぐらいの卒業生ですね。同世代の卒業生で今回の本では教育ジャーナリストという肩書きをつけた池野茂のコラムに書きましたが、明治の終わりの滋賀師範で校長を務めた山路一遊は、明治の人間ではあるけれど、かなり学生の意志を尊重する、自由にやらせるタイプで、生徒や職員からとても慕われていたようです。卒業生の中からは、自分で

当時のいろんな思想を学んで実践する、多彩な人物が出ています。

八耳　歴史教育の**村瀬仁市**は、家が近くて、歩いておられるのを何回も見たことがあるんですが、こういうユニークな実践をされていたとは知りませんでした。生徒の「天照大神のだんなは誰や」という問いをきっかけに国史教材の問題点を研究していく。木全先生に聞いたら、「（師範学校）附属やから」と言われて、僕自身が附属の出身だから納得したんですが。エリート意識もあって昔から教師を崇め奉るというのではなく、試したり、困らせようとするところがある。

木全　そうそう。村瀬は戦後の回顧録（「教育回想私史」）で、ショックだったと書いています。普通の学校だと生徒は、疑念を持ちつつ言わないようなことでも、附属の生徒は言いますよ。

――それは神話から始まる戦前の国史は教えづらいですね。

木全　村瀬自身が、疑念をもっていてそのまま教えることに抵抗があった人だから。この人個人のセンスもある。戦後まもなくは適格審査ではねられた時期もありますが、最後は校長会会長を何年も務めた大校長です。長生きなさったので、もうちょっと早く知っていればお話を聞けたのですが。

久保田　八耳さんが担当した**西川綾子**は、NHKの番組[※3]でも取り上げられましたが、今回の本で絵日記が最後、唐突に終わった理由などを、より明確にしておられますね。彼女がキリスト教信者であったことと宣教師のニップ夫妻との関わりから。八耳さんは西川綾子の教え子でもあるんですよね。

八耳　僕が病気で休んだ時に、クラスの子らに見舞いの文章を書かせて届けてくださったり、優しい先生でした。『大津教会史』にはニップ夫妻に関する回想も寄稿しておられ、信仰心が強い方であったのは間違いないですね。

　これは書かなかったんですが、大津教会を立ち上げた矢部喜好という人は福島県の出身で、日露戦争時の唯一の良心的兵役拒否者として知られる人物です。2か月間牢屋に入って、その後、アメリカへ渡ってニップ宣教師と出会う。帰国後、膳所教会と大津教会を立ち上げます。満州事変が起こった時も、賀川豊彦[※4]らと一緒に武力で解決せず話し合えという声明を出しています。

池田　同胞教会はプロテスタントの中でもとくに反戦意識が強い教派。戦争中、すべてのキリスト教の教会が反対したわけではなく、むしろ協力的だったところが多い。

八耳　授業自体は、ちゃんと教科書どおり教えています。学芸会の演目は「楠公父子の別れ」[※5]だったり。そうかといって、鬼畜米英みたいなことは一切言わない。でも、児童たちがそういう意識を高揚させていったから、これはもう書かせる意味がないと判断し、絵日記をやめたのだと思います。

滋賀県の教育関係の資料が集まってくる会に

宮坂　今日、お見せしたくて持ってきたのですが、これは、僕が**浜野鉄蔵**を書く時に使った資料なんです。ある日突然、先輩研究者の方から僕のところに送られてきて。その方が、東京の古書店で購入したものだけれども、自分が持っていても活用できそうにないから、滋賀で研究している私に使ってほしいと。

⬆宮坂さんが先輩研究者から譲り受けた浜野鉄蔵に関する資料

　何が言いたいかといいますと、研究会の活動を積極的に発信していくことによって、滋賀県の教育史関係の資料が自然とこの会に集まってくるような体制にしたい。

久保田　資料を処分するくらいなら、引き取りたいですね。

坂尾　いま、ちょうど小中学校の校舎の改築や、統廃合が増えているので危機的な状況なんですよ。残されていた資料は学校、もしくは地域の博物館へ全部まとめておくとかね。

木全　京都みたいに学校歴史博物館ができるとよいですね。どこか古い校舎を、校舎の保存も兼ねて学校資料の収蔵庫にするとか。管理は、退職した教員にボランティアでお願いして。

久保田・坂尾　やりますよ。

――本日は興味深いお話をありがとうございました。

（2018・6・16）

※2 **天照大神**　日本神話で高天原の主神とされる女神。皇室の祖神でもあり、戦前の国史教科書は、天照大神の物語が最初に置かれていた。

※3 **NHKの番組**　平成26年（2014）8月14日放送のNHKスペシャル「少女たちの戦争～197枚の学級絵日誌～」。

※4 **賀川豊彦**　（1888～1960）キリスト教伝道者・社会運動家。兵庫県生まれ。著書に『死線を越えて』など。

※5 **楠公父子の別れ**　足利尊氏軍を迎え撃つため、桜井（大阪府島本町）で楠木正成と子の正行が別れたという『太平記』にある逸話。

ヤンソン「日本・蝦夷図」

（公財）日本習字教育財団 観峰館　寺前公基（きみもと）

当館は、教育資料として、西洋古地図コレクションを所蔵しています。平成28年には、栗東歴史民俗博物館との共催で「琵琶湖誕生―日本・世界が見開した琵琶湖―」を開催し、古地図に描かれる琵琶湖に注目した稀少な展覧会となりました。

ご紹介する地図は、オランダ・アムステルダムの地図作者ヤン・ヤンソン（1588～1664）が作った日本・蝦夷（えぞ）図の代表的な地図です。ヤンソンは、アムステルダムにおいて出版を生業としていた地図作家です。ヤンソンは、1650年に『世界地図帳』を出版し、後世に「最初の海図地図帳」として高い評価を得ることになる優れた人物でした。

本図は、同じくヤンソン編著『新地図帳』（1658年）に収載されたものです。その構図は、著名なゲラルドゥス・メルカトルの世界地図帳『アトラス』を受け継いだ、メルカトル＝ホンディウス版の日本地図を元にしています。特筆すべきは、フリース（?～1647）の蝦夷地探検の成果を忠実に生かしたことで、初めて北海道の一部が描かれた地図の一つとして知られています。しかし、朝鮮半島を「半島」ではなく「島（INSVLA）」として描き、また縮尺を大きくしたために地名がずれてしまい、江戸が東北地方にまで移動するなど、不備がみられます。そしてテイセラ版世界地図の影響からか、四国を「Tokoesi」、九州を「Cikoko」と表記するなど、地名にも誤りがみられ、17世紀半ばのヨーロッパのアジア地理認識の限界を示しているといえるでしょう。

とはいえ、九州、四国、中国地方、関西地方と、非常に多くの地名が記されており、特に太平洋、瀬戸内海の地名は、その位置関係が正しく把握されています。近畿地方に目を向けると、京（Meaco）の南方に小さく、琵琶湖らしき湖が描かれています。当時の地図に描かれる琵琶湖は2種に分かれ、瀬戸内海からの延長上の海と認識しているものと、本図のように京都の南方の湖としているものがあります。ともに、豊臣秀吉による、巨椋（おぐら）池や大坂へと続く淀川の整備が影響を与えたと考えられます。この後、琵琶湖は京の東方に位置する湖として認識され、「鮭（さけ）の多くとれる湖」などとも表記されますが、それは17世紀末頃になってからのことです。

古地図コレクションの詳細は、中川敦之・寺前公基共著『琵琶湖ブックレット9　ヘン!?な琵琶湖（仮）』（平成30年9月発行予定）にまとめられていますので、あわせてご参照ください。

あけぼのパーク多賀開館20周年記念特別展

水と辿る多賀

7月21日(土)～8月26日(日)
多賀町立博物館

今年はアケボノゾウ発掘25周年、博物館・図書館・文化財センターと公園を併設した「あけぼのパーク多賀」開館20周年の記念すべき年です（博物館の開館20年は来年３月）。

多賀町河内（龍見幸祐）

多賀町は東部に鈴鹿山系の山々が連なり、山奥に源を発する芹川、犬上川が流れる自然豊かなまちです。身のまわりにある水に焦点をあて、多賀町の自然環境と水と人との関わりを見つめなおします。

会場：あけぼのパーク多賀ホール・ギャラリー・美工展示室
観覧料：特別展のみの見学は無料。ただし、常設展示室見学の場合、16歳以上200円
休館日：月曜日（祝日は開館。祝日の翌日は休館）

■ギャラリートーク
7月28日(土)　午前11時、午後1時、午後3時
対象：一般（申込不要）　参加費：無料
お問い合せ先：TEL 0749 (48) 2077

眞蔵と枝下用水
―水神になった郷土の偉人―

7月21日(土)～9月2日(日)
愛荘町立歴史文化博物館

西澤眞蔵が愛用した方位磁針（明治時代　個人蔵）

愛知郡野々目村（愛荘町野々目）に生まれた西澤眞蔵は、麻布・綿布販売で商才を発揮し、後に用水の開削事業に参画しました。明治20年（1887）から愛知県の枝下用水（現在の豊田市南西部を灌漑する用水）開削に取り組み、受益地では「水の神様」として祀られている眞蔵の足跡と関係資料を紹介します。

入館料：一般300円、小中生150円
※８月11日・12日は無料入館日
休館日：月・火曜日（祝日は開館）

■ギャラリートーク
「用水開削に挑んだ西澤眞蔵
―企業的用水経営の成立とその背景―」
７月29日(日)　午後１時30分～３時
講師：古川彰氏（関西学院大学大学院教授）
場所：歴史文化博物館企画展示室
定員：50名　参加費：無料（要入館券）

■展示解説
８月５日(日)・８月26日(日)
午前10時30分～11時、午後１時30分～２時
場所：歴史文化博物館企画展示室
参加費：無料（要入館券）
お問い合せ先：TEL 0749 (37) 4500

原田観峰の書

観峰 ―瞬間の息吹―

開催中～９月９日(日)
観峰館

観峰館を運営する「公益財団法人 日本習字教育財団」の創立65周年を記念して開催する創立者・原田観峰の作品展。観峰は「正しい美しい愛の習字」を理念に掲げて、生涯に多くの手本課題を残しました。彼自身も、書道家として、自由で多彩な作品を数多く遺しました。観峰が書いた、その時々の息吹を感じていただける展覧会です。

入館料：一般500円、高校生・学生300円、中学生以下無料
休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）
お問い合せ先：TEL 0748 (48) 4141

中路融人遺作展 その画業を辿る

開催中～９月30日(日)
東近江市近江商人博物館・中路融人記念館

中路融人「浜」

昨年７月に逝去した中路融人氏。本展では、ご遺族から新たにご寄贈いただいた作品を中心に展示します。日展初出品作の「浜」をはじめとする青年期の大胆な作品や生涯の画題となった滋賀、中国の蘇州や紹興、晩年挑戦した京都など、残された作品から、63年の画業を振り返ります。

入館料：大人300円、小人150円
休館日：月曜日（祝日は開館）、祝日の翌日
お問い合せ先：TEL 0748 (48) 7101

化石発掘体験 in びわプリ

８月４日(土)・５日(日)
びわ湖大津プリンスホテル

びわ湖大津プリンスホテルの夏のイベント「こども応援プロジェクト」と連携して、多賀町の古琵琶湖層群の粘土層の粘土から化石を発掘します。

午前10時30分～12時、午後２時30分～４時の２回

場　所　びわ湖大津プリンスホテル
参加費　１人1000円（保険代を含む）
定　員　各回30名
お問い合せ先　びわ湖大津プリンスホテル　TEL 077 (521) 1111

※発掘した化石はお持ち帰りいただけます。ただし貴重な化石は除く。

鎮守の神様
五箇(ごか)神社の歴史（誌）と宝物

諏訪一男 著
Ａ４判並製本　総96頁　非売品
問合先 東近江市宮荘町988（著者）

「五箇の森」に鎮座する五箇神社に伝わる文書類と、大太鼓・神輿・曳山などの宝物をカラー写真つきで紹介。　（2018. 4 刊）

第五句集　青嵐(あをあらし)

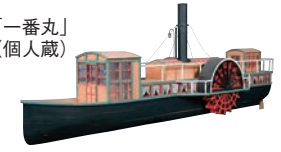
佐々木国広 著
Ａ５判並製本　総104頁　頒価1,000円
問合先 TEL0748（48）6036（著者）

解(ほぐ)れゆく　髪の喘ぎや　青嵐――評伝小説『蕪村伝』（まろうど社）も著して後、蕪村を師と仰ぎ、自ら句作をてがけるようになった著者の近作450句余りを収録。(2018. 7 .30刊)

企画展
明治150年　長浜の近代化

７月28日㈯～９月２日㈰
長浜城歴史博物館

汽船「一番丸」模型（個人蔵）



明治150年を記念して、鉄道・蒸気船・県下初の小学校開校と国立銀行設立、商業の発達などをテーマに資料を展観します。

入館料：大人（高校生以上）400円、小・中学生 200円
休館日：開催期間中は無休

■関連講座
「明治の近代化 ―湖北・長浜の鉄道遺産―」
８月26日㈰　午後１時30分～
講師：小野田滋 氏（鉄道総合技術研究所担当部長）
会場：湖北文化ホール（長浜市湖北町速水）
参加費：500円（友の会会員は無料）
お問い合せ先：TEL 0749（63）4611

第26回企画展示
化石林　ねむる太古の森

７月21日㈯～ 11月25日㈰
滋賀県立琵琶湖博物館

化石林（愛知川河床）

地層にめむる化石林・埋没林を通して、動物が生息した太古の森の豊かな生態系や、古琵琶湖から琵琶湖に至るまでの、湖を取り巻いてきた森の様子や移り変わりを紹介します。また、氷期の森の気温を体感する展示や、縄文時代の温暖な森を利用した木製品を展示し、人の暮らしを紹介します。

入館料：一般 300円、高・大学生 240円、小・中学生 150円
休館日：月曜日
お問い合せ先：TEL 077（568）4811

第58回企画展
寺と城　―近江の瓦―

７月21日㈯～９月24日㈪・㈷
滋賀県立安土城考古博物館

これまでに紹介されることが少なかった平安～室町時代の瓦を中心に、古代寺院や城郭出土の瓦を展示し、近江における瓦の変遷や特徴について考えます。

坂本城跡出土鯱瓦(しゃちがわら)

入館料：大人500円、高大生300円、小中生無料
休館日：８月27日、９月３日・10日・18日

■関連博物館講座
第１回「飛鳥時代の寺院と瓦」
７月25日㈬　午前10時30分～ 12時
講師：仲川靖 氏（滋賀県教育委員会）
第２回「奈良時代の寺院と瓦」
８月８日㈬　午前10時30分～ 12時
講師：北村圭弘（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）
第３回「中世の瓦 ―寺院から城郭へ―」
８月22日㈬　午前10時30分～ 12時
講師：山口誠司（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）
第４回「近世の瓦―栗太瓦―」
９月８日㈯　午前10時30分～ 12時
講師：小宮猛幸氏（草津市教育委員会）
会場：安土城考古博物館セミナールーム
定員：140名（当日受付午前10時～　先着順）
参加費：200円
お問い合せ先：TEL 0748（46）2424

「おとなのディスカバリー」（右）「ディスカバリールーム」（左）

おとなのディスカバリー
ディスカバリールーム
第２期リニューアルオープン！

滋賀県立琵琶湖博物館

琵琶湖博物館の第２期リニューアル工事が一部完了し、７月６日㈮、「おとなのディスカバリー」と「ディスカバリールーム」がオープンしました。

お問い合せ先 TEL 077（568）4811

秋の「樹冠トレイル」完成後、本誌130号（2019年１月）で、第２期リニューアルを特集する予定です。

編集・発行／サンライズ出版株式会社　〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町655-1
発行日／2018年7月20日／第30巻第1号（通巻128号）　発行人／岩根順子　編集人／岸田幸治・矢島潤　協力／滋賀県博物館協議会

琵琶湖博物館ブックレット7

琵琶湖はいつできた

地層が伝える過去の環境

里口保文 著
A5判並製本　総120頁　1500円＋税

琵琶湖は、いつ、どうやってできたのか？400万年前の元型（古琵琶湖）から現在に至るおいたちについて、地層を手がかりに追究した最新成果を、カラー図版とともに解説。

遊びの復権

子どもが育つ環境づくり

奥田援史・炭谷将史 著
四六判上製本　総218頁　3000円＋税

保護者も協力した手作り遊具で知られる川和保育園（横浜市）、大型木製遊具を備えた水口幼稚園（甲賀市）など、保育・教育現場での事例をもとに、“遊び”の復権を提唱。

湖の城・舟・湊

琵琶湖が創った近江の歴史

太田浩司 著
四六判並製本　総144頁　2400円＋税

叶匠壽庵発行の広報誌『烏梅』連載を書籍化。「水城」「舟運」「戦乱」「湊」「島」「漁業」のテーマ別に、琵琶湖という存在によって形づくられた近江の歴史を案内。

近代滋賀の教育人物史

滋賀県教育史研究会 編
A5判並製本　総226頁　2200円＋税

明治初期から滋賀県の教育行政や地域の学校創設に関わった人物、大正期の女子教育や聾唖教育・盲教育の先駆者、昭和初期に先進的な郷土教育や国語教育を実践した教師など、29名（うち女性6名）の業績と人物像を紹介。

世界一変な火山

知床硫黄山ひとり探査記

山本睦徳 著
A5判並製本　総184頁　2000円＋税

1936（昭和11）年に中腹から10万トンを超す大量の溶融硫黄を噴出した知床硫黄山（北海道）。硫黄噴出のメカニズムに興味をもった著者が、単身、最果ての地で謎の解明に挑む。

技術は人なり心なり

石原裕次郎から空海までの技術者魂

原 稔明 著
B6判並製本　総176頁　1300円＋税

40年以上にわたりダム建設に関わってきた著者が、白洲次郎、三島由紀夫、空海など、誰もが知る人物を糸口に、ダム技術の進歩と技術者に必要とされる姿勢を説く エッセイ。

邪馬台国と狗奴国の時代

古墳の方位が示すもの

千城 央 著
A5判並製本　総192頁　1200円＋税

邪馬台国は野洲川流域にあり、伊勢遺跡（守山市・栗東市）はその祭祀施設だとする著者が、陰陽五行思想などをもとに、卑弥呼の墓は琵琶湖対岸の比叡山付近にあったと唱える。

遺稿集　あしあと

乾 佑五 著
四六判上製本　総264頁　非売品
問合先　甲賀市信楽町神山571-2（乾明美）

旧制水口中学3年で海軍飛行予科練習生に志願、復員後、滋賀県下の中学校・高校で教員を務め、昨年2月、88歳で亡くなった著者の遺稿集。手紙類や詩、小説、追悼文などを収録。（2018. 2. 4刊）

表紙写真　鏡山小学校集合写真（1910年3月）竜王町立竜王小学校所蔵
浜野鉄蔵が訓導兼校長と勤務していた時期にあたる。

編集後記　『近代滋賀の教育人物史』をお読みになった方からの連絡で、東近江市にあるお寺に神田次郎の碑があることが新たにわかったそうです。滋賀県教育史研究会に学校関連資料をご提供いただける場合は下記まで。　㊥
滋賀大学教育学部　馬場義弘研究室
〒520-0862 大津市平津2-5-1　TEL 077（537）7779

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

お申込先
〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社　Duet編集部
TEL（0749）22-0627　FAX（0749）23-7720
（振替）01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
http://www.sunrise-pub.co.jp/